

## 松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

小森真樹

## 【所属】(助成決定時)

テンプル大学歴史学部客員研究員

## 【研究題目】

現代アメリカ合衆国における科学観の再定義：博物館展覧会の利用実態の分析から

## 【研究の目的】(400字程度)

「科学 (science)」とは現代の人々が知の拠り所とするものであるが、社会において科学とはいかなる存在なのか。人々や社会を対象とする人文社会科学にとって、科学を探究することにはいかなる意義があるのか。本研究は、社会学、歴史学、ミュージアム研究の複合領域からこの問いに新たな回答を試みる。

研究の着想は、専門家が定義する「科学」ではなく人々が実際に頭のなかで思い描く「科学」とはなにか、という素朴な疑問に端を発する。現実には、ごく少数の専門家の考える科学を超えて「科学なるもの」が理解され、普及し、その結果社会で構成された科学観が、政治経済や社会を動かしていることは疑いようがない。だが、こうした点を重視する科学研究は未発達で、科学研究者の多くは彼らの考える「正しい科学」のみを対象とする傾向にある。こうした課題を解決することを目的とする。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

この課題に対して、科学博物館の展示を事例として社会の科学観をより実証的に考察する方法を考案した。つまり、公的・専門的な科学知の生産と、教育・娯楽といった人々の日常的な行為が交差する博物館の調査を通じて、社会において「科学」という考え方が人々にどう受け止められるのかの実態を調査した。本研究では「科学」と「文化」を鍵概念とした。そして、人々が「科学／文化」、「科学／非科学」や「文化／非文化」をいかに線引きしているのかを考察した。すなわち、これらの概念が分けられる構造から、社会における「科学」「文化」の両概念がいかに形づくられているのかの理解を試みた。

事例は現代アメリカにおける以下の博物館である。下線部に掲げた四つの視座から現代アメリカの科学観の描出を試みた。

- ① 科学と展示倫理：フィラデルフィア医師協会付属の「ムター博物館 Mutter Museum」の人体展示(ペンシルベニア州フィラデルフィア)
- ② 科学と現代宗教：聖書の天地創造神話についての科学博物館「天地創造博物館 Creation Museum」(ケンタッキー州ピーターズバーグ)
- ③ 科学と人種・異文化展示：世界チェーンの珍奇品博物館「リプリーの信じようと思じまいと Ripley's Believe It or Not?!」(世界各地 32 館のうちフロリダ州オーランドとニューヨーク市の 2 館)
- ④ 科学と博物館信仰：疑似自然科学史の博物館「ジュラ紀の技術博物館」(カリフォルニア州ロサンゼルス)

## 【結論・考察】(400字程度)

科学概念の構成過程の構造を抽出することで得た知見を以下に挙げる。

- 展示制作者や科学者など専門家＝送り手の意図は、現実の科学観を規定する一つの要因に留まる。むしろ伝達の過程や、来館者による受容の過程の影響が大きい
- 「科学」は先だって存在せず、あるコミュニティの条件に従い共通理解によって構成される(＝「物

語としての科学」と呼ぶ)

- 近代科学に根ざした理念として科学者集団が抱く（あるいは普遍性を持つ実態としての）「理想的近代科学」と、各アクターの影響のもと民衆の共通了解として構築される「物語としての科学」を別の概念として理解する必要
- 「物語としての科学」を構成するメディアとしてのミュージアムの重要性

結論として本研究は、従来の科学研究が対象としてこなかった現代社会における科学の断面から、構成主義的な「科学」概念を実体的に描写した。科学は陳腐化した旧来の科学的知見や（＝事例①）、信仰に基づく擬似「科学」は（＝事例②）、近代科学者からは科学として認められない。だが、ある共通のコミュニティにとっては、「科学博物館」という範疇を通じて「科学」としての根拠を獲得し、「文化」の範疇で語られて別種の科学とみなされていくのである。